

大阪府知事、大阪市長のダブル選挙を直前にして、橋下徹大阪市長候補の部落出身という出自が週刊誌等で大々的に報道された。元々は、橋下さん自身が「部落で育った」と公言したことに端を発しており、橋下さんの出自に関するアングラ報道は早くからあった。ボクが二年前、森功さんというルポライターの取材を受けたのも、橋下さんとボクに「部落つながり」があり、府営公園の指定管理者選考に影響を与えたのではという疑念からだったようで、週刊ポストの記事は、思い込みが過ぎて「森さんらしからぬ」勇み足ルポだったと思う。

二年程経って出自情報が突然メディアに躍り出たのは、橋下さんの「挑発」にメディアが乗ったものだ。それが、取材者、編集者、広告者と人を介することで、次第に煽情化し、差別報道と断じられるものへと純化した。背景には、ある種の部落問題報道「解禁」の風潮もある。そして、橋下さんはこれを引き取って、「オヤジが暴力団で、部落で、どこが悪い、けっこうけだらけ！」と応じた。パッシングを逆バネにできるのは橋下だけという、この三年余、何度か見てきた橋下劇場の定番のシナリオがここでも演じられた。

これで部落問題は、橋下さんにとって「自分の問題」になった。逆バネにしたのは流石に橋下さんだが、ご家族の衝撃は大きかったろうと推察する。部落問題に「自分事」と向き合うのは



橋下劇場の部落問題はわかり易いが、深くない

立派だが、「自分だけの問題」ではないし、正義が悪を懲らしめる式の問題でもない。もつれた糸（関係）を丁寧に解きほぐすような複雑系社会問題であるとボクは思う。教育条例や職員条例も、「大阪市は最悪の事態、解決策は都構想のみ」という論法も、勸善懲悪式橋下劇場のシナリオで、木は見ても、森は見えない。選挙戦、西成区役所前で橋下さんが切った、生活保護急増を止めるのは「仕事増、所得増」との大見得も、耳触りは良いがはつたりに近い。部落問題も含めて、ボク達がこれから向き合う地域社会の諸問題（諸関係）は、とても複雑系で、人と人との相互交流によって、右にも左にも行く「深さ」を持っており、そこに危険も活路もあると思う。

知人のみなみあめんぼうさんがHPに長く使っていた言葉から借りると、大阪弁の「にゃんにゃん」というのは、難しいことをわかり易くという意味だが、平易に見えることを深く掘り下げ、共感するということも意味している。ボクは、橋下さんのわかり易さには脱帽するが、深さは感じない。橋下さんは、沈殿した部落差別が吹き出る様を見せたが、大阪人の部落問題への「にゃんにゃん」の営みを省みる深さはなく、水は彼の田んぼにだけ流れるように見えた。

この拙文は、投票日前に書いているので、大阪の人たちが、橋下さんの「わかり易さ」を選んだか、「深さ」を問い直したかは知ることはできない。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



# 榎山節考



監督：木下恵介  
 原作：深沢七郎  
 キャスト：高橋貞二  
 田中絹代  
 望月優子  
 劇場公開：1958年カラー  
 98min  
 DVD発売：松竹ホームビデオ

僕らのダイエーとは、家から歩いて3分と  
 かからない田辺大映という小屋（映画館）の  
 ことだった。旧平野線田辺駅（現地下鉄谷町  
 線）周辺にはこのほか4つの小屋があり、今  
 も営業を続けるタンキー（田辺キネマ）を残  
 してすべて廃館となってしまった。

田辺大映で封切りされた松竹製作の「榎山  
 節考」を、お袋に連れられて見に行ったのは  
 中学2年生の頃だ。そして、それまでの映画  
 とは明らかに表現様式が違っていたことと、  
 おりん婆さんが、元気な前歯を石臼で自ら打  
 ちつけ血だらけになるシーンが恐ろしく、い  
 まだ記憶に残る逸編となった。

その上映2年後の1960年に起きた右翼少  
 年による出版社襲撃事件が、「風流夢譚」と  
 いう小説の内容に抗議したもので、その著者  
 名を深沢七郎といい、「榎山節考」の作者で  
 もあるということを知った。そのまた数年後、  
 深沢が著わした「人間滅亡の唄」や「庶民列伝」  
 などの小説に惹かれ、反権威や反小市民性に  
 加え、人間の虚飾を暴く彼のユーモラスな厭

世観は、今も強く僕の細胞の一部に残ってい  
 ると思う。

「榎山節考」は、木下恵介監督がほぼ原作  
 を踏襲した映画だ。信州の貧村で、息子の後  
 添えが決まれば、おりんの役割は来年お山ま  
 いりをするだけだ。つまり70才になれば村  
 の掟である姥捨ての榎山へ行く決心をしてい  
 る。おりんが元気なため、村人がお山まいり  
 をはやしたてたり、他人の畑の作物を盗んで  
 村全体から報復される村人家族が描かれたり、  
 年に一度の祭りで白い米を炊いたり、  
 極貧だが牧歌的でもある暮らしを描きなが  
 ら、しかし、お山に行く作法を村役たちから  
 聞き、遂に息子に背負われ幽玄と畏怖が渦巻  
 く榎山へ死の道行となる。人減らし、口減ら  
 しの残酷で悲惨な話を、おりん婆さんの楽観  
 的諦観を田中絹代が見事に演じ、恐ろしく  
 らいにリアルであった。

すべてのシーンは撮影所内でのセット撮影  
 だし、背景も書割（かきわり）である。シー  
 ンの転換では突然幕が下ろされ、その次の  
 シーンに移動していくという演出で、バック  
 グラウンドには浄瑠璃が語られ、これらは歌  
 舞伎舞台を想定していて、色彩や照明の演出  
 が様式的であった。

いずれにしても、この作品にロケ撮影が一  
 切なかったというのが特色と思いきや、最終  
 場面、突然蒸気機関車が榎山の溪谷を走る短  
 いモノクロシーンとして挿入される。もちろ  
 んこの実写の記述は原作にはないけれど、木  
 下監督はこの場面をどんな意図で思いついた  
 のか。今では蒸気機関車も化石化したけど、当  
 時はモダンと自由の象徴であった。山あいの  
 貧村で困習を抱えて暮らした人々へ、機関車  
 を自由のメタファーとして手向けたかったの  
 だろうか。

hidarimaki

※榎山節考は、1983年今村昌平監督でリメイクされた。